

訓 示

平成21年7月3日

みなさん、おはようございます。今日から私の2期目が始まりました。初登庁の出迎え、ありがとうございました。

私は、この4年間、職員みなさんのお力をいただいて、これまで礼文町発展のために一生懸命働いてくださった高齢者のみなさんや将来の礼文町を担う子供たちのため、また、島で働く多くのみなさんのために「礼文町に元気を取り戻し、安心して暮らすことのできるふるさとをつくりたい!」と努力を重ねてまいりました。そして、町民のみなさんには、私の一期四年間の航海が、どのように写ったのか? ひとつの節目として、私の一期4年間の評価をいただくために港に帰ってきたことを申し上げてまいりました。

そして、6月23日の町長選挙においては、町民みなさんの温かいご支援ご支持をいただき、お陰様で無投票再選という大変な栄誉を賜りました。多くのみなさんから、激励の言葉をいただき、職員みなさんに、心から厚く感謝申し上げるところでございます。

しかしながら、多くの町民みなさんの理解が無投票という

結果に表れておりますが、私の一期四年間の航海が、決して100パーセント全面的な信任や支持を得たわけではありません。厳しいご意見もたくさんいただきました。

私は、不満や批判を含めた声なき声をしっかりと受け止め、これからの4年間町民みなさんの声を大切にしながら、心を砕いて頑張っていきたいと考えております。

今、町の現状は楽観視できる状態にはありませんが、消極的になっては何も生まれません。夢と希望、そして情熱を持って、礼文町に元気を取り戻し、元気な礼文島を作り上げ、みなさんが住むことに誇りを持つことができる そんな元気いっぱいの礼文町にしたいと思っておりますので、職員のみなさんにおかれましても、それぞれの立場で本町の発展にご活躍いただきますよう、心からお願いを申し上げます。

そのうえに立って、私の所信をふたつほど申し上げたいと思います。

ひとつは、あらためて申し上げるまでもなく「わたしたちの仕事は町民みなさんの幸せのためにある」というのが基本

原則であります。

今回の選挙を通して、私は「職員は町づくりのリーダーである」ということをみなさんにお話をしてまいりました。

今、NHK 大河ドラマで「天地人」という物語が放送されています。越後の上杉景勝と直江兼継の「義を尊ぶ国づくり」のはなしであります。あの話にもあるように、私は、「町づくりのリーダー」とは、「義を行う指導性を備えること」であると考えております。そして「義を行う」と云うことは、私たち自身が、正直ものが正直に生きていける社会をめざすという人間としての魅力を備えることであります。正直ものが馬鹿をみない世の中を作り上げていくことだと思えます。まさしく「清く正しく美しく」働くことだと思うのでございます。

「変わる」ということは大変なことであると思いますが、私は四年前「管理から経営へ」という考え方が必要であると申し上げました。それは行政が法律や条令に基づいて行われるために、これまで私たちは、すべて「管理すること」が自分たちの仕事だと固く信じてきたからであります。しかし

「経営」とは、努力するとか、頑張るとか、工夫するとか、計画的にやるといった当たり前だけれどもとても難しいことを前提にした「結果を大切に作る」考え方でございます。実態に合わなければ規則の方を変えればいい、前例がなければ前例をつくれればいい、行政にできなければ民間にやってもらえばいい、そうした柔軟に思考する「管理から経営へ」の転換によって、所謂「ほう（報）れん（連）そう（相）」の徹底や「仕事のスピード感」など、私は、職員みなさんの意識が少しずつ変わってきたと思っています。そうした経営という意識、感覚を持つことにより「元気な礼文づくり」や財政の健全化も「集中改革プラン」を一步一步地道に、また、確実に進めることができたわけであります。お陰様で「実質公債費比率」も「21.0」まで改善することができました。

しかしながら、財政の健全化を表す「実質公債費比率」が危険ラインといわれる「25.0」を下回ったと云っても、まだまだ安全ラインになったわけではありません。まだ80数億円の起債残高が残っているのであります。今は、アメリカの金融不況に端を発した世界的な景気の後退が続いている

中で、盛んに国の経済危機対策などが行われておりますが、来年度以降は、これも確実に厳しくなっていくと思います。したがって、これからも厳しい状況の中で、更なる財政健全化に向けた挑戦をしなければなりません。ちょうど今年は、次の10年間の総合振興計画を策定する大事な年であります。今の私達や将来の礼文町に必要なことを実現するため、職員みなさんには、従来の既成概念を取り払い、積極果敢に挑戦していく気構えと強い意志を持っていただきたい。それが「管理から経営へ」ということの趣旨でございます。

そして、もうひとつ。これは先日「チャレンジデー」で対戦した島根県海人町の山内町長のおっしゃっていたことではありますが、「天下の憂いに先立って憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ」という「**先憂後楽**（※）」の精神を職員みなさんに持っていただきたいのであります。

所謂「行政というのは“憂い”があれば町民の方よりも先に気づいて、これに対処し、それがうまくいって“楽しみ”ができて、それを享受するのは町民の皆さんより後でい

い」という考えであります。大変難しいことかも知れませんが、職員の皆さんには、常に、この考えをもち、町民みなさんのニーズを理解し、何が求められているか、あるいは、何が必要なのか等々をきちんととらえて「元気なふるさと礼文」を創る「清く正しく美しい」リーダーになってほしいと願っています。

※先憂後楽の精神

中国北宋の政治家 汜 仲庵（989年～1052年）が記した「岳陽樓記」（1045年）の中に政治を志す心構えを記しています。

二点目は、「定住自立圏構想への対応」であります

私にとって最大の行政課題は市町村合併問題であると考え、この4年間、町民懇談会を開き、議員皆さんと協議をしてまいりましたが「利礼三町での合併」という議会の意見と私の意見の一致をみることはできませんでした。

このため、それ以上この問題を進めることができなかつたこと、そして、結果として、わが町の進むべき道を示すことができなかつたことを大変申し訳なく思っています。したがって、合併新法の期限内にわが町がどこかの町と合併すること

極めて困難であり、当面、礼文町は単独で自立の道を歩まなくてはなりません。

そうした中で、先日示された第29次地方制度調査会の答申では、合併新法による国の合併推進も、来年3月で期限切れとなり、これ以上の合併促進は行われなないこととなります。

しかし、合併できなかつたことで、すべてが解決したわけではありませし、合併しなかつた町村が、今後、優遇されるということも決してあり得ませし。むしろ、地方分権が進み、住民に最も身近な行政体として行政基盤の強化が求められてまいりますが、昨今の世界的な景気後退も相俟って小規模な町村は益々厳しい状況に置かれると思ひます。

そうした状況から、総務省は「定住自立圏構想」により自治体間の新たな連携策を打ち出しました。これは、原則人口五万人の中心市と周辺町村が、圏域全体の暮らしに必要な機能を強化して、圏域全体の住民サービスを向上させるなど、周辺市町村が具体的な分野の協定を結んで連携を強化しようとするものであります。幸い、宗谷町村会においては稚内市を含めて「定住自立圏構想」の検討を始めようとする動き

が出ております。今後、「平成の大合併」に代わるものとして「定住自立圏構想」への対応が求められてまいります。具体的に協定を結ぶ分野としては、例えば、低迷する観光振興対策のひとつとして、町村それぞれが観光対策を行うよりも稚内、利尻、礼文がひとつの「観光圏」という形で連携する取組が必要ではないかと思っています。そして、どうすれば日本のてっぺんに「にぎわい」をつくり出すことができるか、そのことをこの「定住自立圏構想」を活用し、地域が連携して解決する道を探っていきたいと考えています。

このほかにも、財務会計の共同処理、地域の医療、介護や福祉の分野など、今後、さまざまな分野での検討が行われてまいりますので、職員みなさんも、これらにしっかりと対応していただきますようお願い申し上げます。

以上、二点を申し上げまして訓示といたしますが、先日道内の有名な菓子製造の会長さんが礼文に来られました。会長さんと言いましても、まだ若い方でした。そして「礼文島は人も車も多いし、活気がとてもある町ですね、他の道

内の市町村と全然違います」とおっしゃられました。私は、大変うれしく思いました。礼文町は日本最北端の離島で、町の規模や予算、そして地理的にも決して好条件の町ではありませんが、私は、生まれ育ったふるさと礼文町が大好きであります。そして、首長という職にある誰もが課題を抱えながらも、その職務に励んでおられることを自らの励みとし、職員のみなさんや町民みなさんの知恵と工夫をお借りして「元気な礼文町」を創ってまいります。どうぞ、職員のみなさんにおかれましても、この困難な時代を乗り越え、礼文町の明るい未来を切り開くため、厳しい中にも笑顔を忘れず、「町づくりリーダーとしての夢と情熱、そして自覚」を今一度、認識していただきますよう、心からお願いを申し上げまして訓示といたします。4年間、どうぞ、よろしく願いいたします。